

# 教育の樹林

## 〈砂場〉はなぜ存在するのか

— 〈砂場〉の保育文化史 —



北海道教育大学釧路校助教授

笠間 浩幸

●初等教育資料 平成14年11月号(No. 761)

### 1 〈砂場〉という 遊具へのこだわり

ある幼稚園の先生は言う。「子どもは、砂に手が触れたそのときから、そして砂場に足を踏み入れたその場所から、もう遊びは始まっている」と。おそらく、多くの保育者、なかには小学校の先生も、このことばにうなずく方が多いのではないだろうか。

〈砂場〉では、わずか三歳の子どもでも、一人で一時間以上夢中になって遊ぶことができる。年長児ともなれば友達同士、協力しあって大きな山をつくったり、深い穴を掘ったり、水を注いで川を流したりと、さまざまな想像と創造を許す空間として、〈砂場〉はしっかりと子どもたちの心をとらえる。

全国各地に様々な子ども遊び場づくりをすすめてきた仙田満氏は、著書「子どもとあそび」のなかで〈砂場〉について次のように述べている。

私は砂場はどんな遊具よりも優れていると思う。……そんな砂場に匹敵する遊具をつくってみたいと二十代のころ私は考えた。しかし、三十年近くたった今も

私はまだそのような遊具をつくること  
できない。

仙田氏をして、右のように言わしめる〈砂場〉。かといってそれは、決して大層な手の込んだ遊具ではない。むしろこれ以上のシンプルさはないといえるほどの、単に多量の砂が盛ってあるだけの屋外空間である。

そのためであろうか。あまりにも当たり前  
前の遊具として、時としてその意味や「す  
ごさ」が忘れられてしまうことがある。大  
や猫による〈砂場〉の汚染問題からはじま  
り、近年では、園児服や園舎が汚れること  
を嫌って、保育者が子ども砂遊びを禁じ  
てしまうという事態さえ耳にすることがあ  
る。果たして、〈砂場〉はそんな程度の遊び  
場なのだろうか。

そもそも、この〈砂場〉という空間はど  
のようにして子ども砂遊び場として登場し  
たのだろうか。自明とも思われる〈砂場〉で  
あるが、それは海浜や河原など自然の砂地  
の場所とは違って、わざわざ大人たちが子  
どものために作りだした人工的な遊びの  
空間である。では、その「わざわざ」のな

かには、一体どのような子どもへの思いが  
潜んでいたのだろうか。

〈砂場〉を人工的な遊び場、一つの文化空  
間としてとらえるならば、その文化を支え  
る文化観、言葉をかえれば子ども観、遊び  
観、そして保育観とはどのようなものであ  
ったのか。〈砂場〉の保育文化史研究として  
の課題はここに始まる。

### 2 日本における〈砂場〉の普及

日本で最初の幼稚園は明治九年設立の東  
京女子師範学校附属幼稚園であるというの  
はよく知られたことであろう。では、この  
最初の幼稚園に〈砂場〉はつくられていた  
のだろうか。意外なことかも知れないが、  
実はそこに〈砂場〉はなかった。

日本の場合、〈砂場〉が幼児教育の場に普  
及していったのは明治三〇年代後半以降、  
大正期にかけてのことである。〈砂場〉とい  
うのがまだどのようなものか一般に知られ  
ていないころ、文部省はある公的文書の中  
で「砂場 若干ノ地積ヲ画シテ砂ヲ盛り以  
テ幼児ノ砂遊びニ充ツ」(明治三二年、幼稚

園庭園設計方」と説明していた。

この程度の認識しかなかった〈砂場〉で  
あるが、大正初期までには「砂場の教育的  
価値は更めていふ迄もない」どの幼稚園  
でも大抵砂場のないところはなし「倉橋惣  
三」といわれるまでにその位置付けは高ま  
り、さらに大正一五年の「幼稚園令施行規  
則」において、〈砂場〉の設置が義務づけら  
れるに至ったのである。

明治期における〈砂場〉の登場とその後  
の急速な普及の経緯は何を物語るものなの  
か。それは幼児教育そのものの考え方と密  
接な関係をもつ。周知のように、明治期前  
半の幼児教育は、あたかも学校の授業と見  
まがうような、教師主導、フレイベル恩物  
の形式的教授が主流であった。たとえば、  
積み木(恩物)といえども、子どもが自由  
に積んで遊ぶのではなく、先生が示した見  
本に倣い、机の上に引かれた柁目に沿って、  
辺や角がずれないように積み木を置いてい  
くという指導であった。

しかし、明治期も半ばを過ぎるころから、  
子どもの自発的な活動や経験の重要性が強

調されるようになり、〈砂場〉はまさにそれにふさわしい遊びの環境として受け入れられていくことになる。たしかに〈砂場〉では、誰もつくるべき見本を提示しなくても、子どもたちは多様に遊びを展開していく。一人遊び、並行遊び、集団での遊び、ごっこ遊び、イメージをふくらませながら大小いろいろなものをつくる遊び。そんな姿を目の当たりにした当時の保育者たちは、遊びを観察することの重要性とともに、何よりも子どもことは子どもから学ぶべきであるという考えに到達していったのである。〈砂場〉はまさに、新しい教育主張、子ども観を具現化した遊び場だったといえる。

### 3 欧米に見る〈砂場〉の歴史

日本の〈砂場〉の設置に直接的な影響を及ぼしたと考えられる出来事。それはアメリカにおけるブレイグラウンド・ムーブメント（児童遊園設置運動）である。一八八五年、ボストンのパーメンター通りに、アメリカで最初の〈砂場〉がつけられた。当

時、その地区は悲惨な環境が渦巻く貧民街であった。失業や貧困、暴力や不衛生が街を覆い、子どもたちも当然のことながらさみきつていた。そんな地域に子どもらの健全育成を願う人々によって〈砂場〉がつけられたのである。

大きな〈砂場〉で一日中遊んだ子どもたちは、心から満足して家に帰った。遊びを通じたエネルギーの発散は子どもたちの心身を開放し、誰の目にもこの遊び場の価値は明らかであった。すぐに〈砂場〉はボストン市中に広まり、やがて全米へと広がって、〈砂場〉のほかにもいろいろな遊具を併設した児童遊園づくりの運動、いわゆるブレイグラウンド・ムーブメントと呼ばれる画期を呈することになったのである。

もちろん、アメリカの幼稚園でも〈砂場〉はすぐに取り入れられていくが、それはかたくななフレール主義の幼稚園ではなく、むしろそれを批判する進歩的（子どもの自由と自発性を尊重する）幼稚園において導入されていったことが興味深い。これらの様子は当時の教育雑誌において

ないが、〈砂場〉の誕生には、子どもたちの遊びを見守る大人たちのやさしいまなざしと、遊びの本質を見抜こうとする鋭い観察力がその底辺にあったことはたしかである。

### 4 身体感覚形成の課題と子どもの遊び

保育文化史の追究は、単に過去の事実を

集積することにとどまるのではなく、むしろ今日の課題意識を起点に、対象とするものの意義・特質を時代の中に浮き彫りにしていくことである。それにより過去との比較を通して改めて今日の課題を多面的に把握することが可能となり、他方、過去の経緯に今日の問題の萌芽を見いだし、連続する課題変容の経緯を辿ることができると考える。

〈砂場〉という、今日ではきわめてありふれた遊具も、その発生と普及の過程においては、子どもという存在、遊びというものをどのようにとらえ、何を大事にしようと考えているのか、という教育における根幹ともいふべき問題と無縁に存在するものではなかった。

今日、残念ながら一部で見られる〈砂場〉からの子どもの引き離しは、歴史的に形成されてきた子ども観、遊び観（子どもの自由で自発的な遊びの重要性）を放棄することにはほかならないものとして、私は大いに警告を発したい。

そして、もう一点、今日の子どもたちが

紹介され、それがはるばる海を渡り、明治三〇年代の日本にも伝えられたのである。

〈砂場の起源は最終的にドイツへと遡るものである。そこでは世界で最初の幼稚園、フレールの幼稚園に〈砂場〉はあつたのかなかつたのか、ということも興味深い疑問となろうが、話題はそれだけではない。ドイツにはフレール以前にも幼児学校と呼ばれる施設が多数存在しており、そもそも幼児のための教育施設とは一体何のために、どのようなものとしてつけられたものだったのか。それぞれの施設や教育方法の違い、互いの影響や交流というのはどんなふうに進んだのか。また、ドイツにおける児童遊園の思想と歴史にはどのようなものがあったのか。そして、子どもが土や砂に触るといふ五感を直接的に刺激する体験をドイツではどのようにとらえていたのか。これらの疑問にも注目しながら、その中で〈砂場〉が果たした役割、そして何よりも、いつどこで、どんな状況の下で、〈砂場〉という人工的な遊び空間が誕生したのか。紙幅の都合によりこれ以上の記述はでき

置かれているパーチャルの知覚を主とする体験と身体技能の不自由性との関係において、〈砂場〉のような体感的遊び場の必要性を大いに強調したい。

折しも「泥だんご」づくりに没頭する子どもたちの姿が注目されているが、このように幼児期において「泥、土、砂、水」に徹底的に触れることの意義と重要性を、私たちは改めて子どもたちの遊びの中に探り、研究していく必要があると考える。

「砂まみれ、泥だらけで遊ぶのは、子ども時代の特権である」というのは、ボストンの〈砂場〉設置に貢献したK・G・ウェルズのことばである。

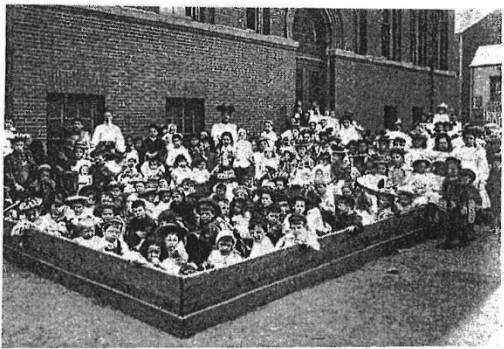
#### 〈参考文献〉

仙田満「子どもとあそび」岩波新書、一九九二年

笠間浩幸「砂場」と子ども」東洋館出版社

二〇〇一年

（かさま・ひろゆき）



ボストン市、初期の〈砂場〉